

小画面物語絵の研究 ―合貝に描かれた絵の分類を中心に―

大阪芸術大学 美術学科 教授 河田 昌之

日本絵画史で物語絵といえ、絵巻や色紙あるいは襖や屏風を思い浮かべることが多い。現在する物語絵もこれらの形状が多くを占めている。絵画史研究においては、完成度や現存する数などから、絵巻や屏風、掛け幅や色紙などが主たる対象として扱われてきた。

いわば美術史のメインストリームを形成するこれらの作品に対して、画面がきわめて小さいことや遊戯具としての性格のために見過ごされてきた小画面の物語絵がある。平安時代の雅な遊戯である貝合（かいあわせ）や貝覆（かいおおい）に用いられる合貝（あわせがい）と呼称される二枚貝の内側に描かれた絵である。

本研究は、物語絵の制作と享受の研究の一環として、江戸時代の合貝に描かれた物語絵を取り上げ、モチーフの省略や表現の簡略化などの絵画としての特性を考え、物語絵の総合的な基盤研究とすることを目的とする。

合貝とは紙に描いた同じ図様の絵を二枚貝の双方の内側に貼って装飾したもので、大振りの二枚貝であるハマグリが用いられる。大振りのハマグリは貝の形や文様を比較する貝合、内側の絵と同じ絵をもった貝を合わず貝覆の遊戯具である。

現存する合貝に描かれた絵を見ると、その大半は江戸時代のものである。合貝の大きさは約縦 7cm、横 9cm が標準と言える。なかでも今回の調査対象の 2 毛利博物館の合貝は約縦 11cm、横 13.5cm あり異例な存在であった。その絵は通常の絵画作品に比べ画面は極小であるが、胡粉を盛り上げて菊花文や亀甲文などを表し、上から金箔を押して金雲とし、物語や動植物を顔料で描く繊細で華やかな画面を形作っている。絵画表現の特徴から、高い技倆の絵師が制作に関与していることを推測させる作品も見受けられる。なかでも物語絵の題材は源氏物語や伊勢物語といった著名な古典文学から選ばれることや、その図様には絵巻や屏風、掛け幅や色紙に見られるものと共通するものも含まれている。一方で、出典が絞り込めるにもかかわらず、モチーフがわずかに異なることで出典を断定しがたいものもある。合貝の絵に絵画的な特性を考えた場合、モチーフの変更や省略、表現の簡略化、見立てなどの要素が加わり、定型の図様をアレンジしながら構成されているものも多い。さらに人物を入れずに草花文、花鳥文などの物語性がたどれない図様で充填する場合もある。物語性や意匠性をもった画面に金箔と濃彩が調和した合貝の絵は、小画面ながら雅な絵画空間を形作っており、江戸時代の琳派の絵画や工芸の図様の制作と共通する特徴も見出すことができる。

合貝に描かれた絵の作品紹介や研究は、美術館や寺社に所蔵される作品が対象とされてきたが、全体像を把握するまでには至っていない。こうした背景には、合貝は遊戯具として取り扱われ、その絵は絵画的な価値を捉えるよりも、貝の装飾として認識される傾向が要因として挙げられよう。また多くの合貝から興味をもった図様だけを選ぶなどといった恣意的な選択によって合貝が断片的にしか伝えられない場合や、破損して片貝しか残らない場合など、伝来や経年による資料としての不統一さも研究上の弊害になっている場合がある。しかし合貝の絵の特徴から物語絵の範疇に入る作品が見出せることは、物語絵の享受を総合的に捉える上で研究対象から外すことはできない。

本研究では、本来の合貝の数量が 100～300 対という数を持っていたことを踏まえ、まとまりのある数量の合貝を対象にした。研究を実施するにあたって、コロナ禍の影響から、当初の計画通りの調査ができなかったが、十分な感染対策を行い、所蔵者の理解を得た上で実行可能な範囲内で調査を進めた。以下に示した作品が本研究での対象となった合貝である。

- 1 林原美術館 合貝 一式 江戸時代
- 2 毛利博物館 合貝 一式 江戸時代
- 3 鍋島徴古館 合貝 一式 江戸時代
- 4 和泉市久保惣記念美術館 合貝 一式
江戸時代
- 5 徳川美術館 合貝 一式 江戸時代
- 6 斎宮歴史博物館 合貝 一式 江戸時代

調査の対象が限られていたものの、従来、図様の主題が「源氏物語か」などとあやふやにされていたもののなかに源氏物語、伊勢物語の題材が明らかにできるものがあり、物語絵の資料が追加できたことは今後の研究に役立つ。また、所蔵者の階層や制作環境によって出来栄の違いがあることは言うまでもないが、江戸時代初期に定型化した源氏絵や伊勢物語絵の図様を継承する絵が合貝に見出せたことで、大画面から小画面にまでそれらの物語絵の図様が共有されており、物語絵享受の一端が見えたことで研究対象が広がった。さらに、物語絵をアレンジしたものには、その雰囲気を残しながら画面が形成されているものと物語絵風の貴人装束の男女や寝殿造風の建物などで構成するが場面の同定からは手掛かりとなるモチーフが欠如しているものがかなり多く見られたことは小画面絵画の特性あるいは遊戯具のそれなのかなどの課題も見えてきた。

今後も合貝の実態把握と絵の解明と分類を継続し、本研究の目的達成に努めたい。